

## 東京での思い出

私は1978年3月、大学卒業と同時に当時の東京本願寺に列座として赴任しました。ここで3年間勤務の後、岐阜県にやってきたのですが、私が退職して3ヵ月後に東京本願寺は真宗大谷派との包括関係を廃止して単立寺院となってしまいました。

列座の仕事は主に儀式作法に関わることですが、赴任して翌月から毎月一回法座に立つことになりました。それまで門徒さんの前で法話をした事がなかったので大変緊張しましたが、初め私は大学で学んできた事をゼミの発表のように話していたように思います。

ところが、数ヶ月が経ったある日に、私が話している最中にHさんという石川県出身のお婆さんがハイと手を挙げて、「先生（東京では坊さんの事をそう呼んでいた）のお話は板書が多くて学校の授業みたいで、私ら文字の読み書きができない者には解りません」と言われたのです。私は頭の中が真っ白になってしまって、それからしどろもどろになり散々な法話になってしまいました。

控室に戻って、この事を先輩に話したら「本願寺の布教師は伝統的に板書はしないで話術だけで仏法を伝えるのが鉄則だった」と言われました。私は暫くの間、法座に立つことが億劫になりましたが、自分の言葉で素直に受け止めた内容をお伝えするのが大切なのだと学ばせてもらいました。

そのHさんには東京本願寺を退職する時に「岐阜県のお寺へ婿養子に行くことになった」と伝えましたら「お寺に生れても嫌がって継がない人が多いのに、貴方は在家からよくぞ入って下さった」と、喜んでくださいました。Hさんは亡くなりましたが、今でも忘れることができません。